



《連合軍のノルマンディー上陸》

連合軍とDデー

北アフリカ、イタリア、そして史上最大の作戦といわれるノルマンディー上陸に至る道程

谷光太郎

◆山口大学教授

Dデーとは？

Dデーとは、英語のDの最初の文字のDとdayを組み合わせで作られた言葉で、初めて使われたのは第一次大戦時に、欧州派遣米陸軍のサン・ミール (St. Mihiel) 攻撃作戦の際である。

もともとは、軍事作戦が開始される未確定の日を指す言葉であったが、第二次大戦時の連合軍のノルマンディー上陸作戦が大規模で、あまりにも有名になったので、この作戦が決行された一九四四年六月六日を指すようになった。

第二次大戦とDデーの意味

欧州方面での第二次大戦は一九三

九年九月一日、独軍のポーランド侵攻で始まり、ドイツの無条件降伏で一九四五年五月七日に終了した。五年と八ヵ月におよぶ大戦乱であった。

この期間を便宜上、前期、中期、後期、終期に分けるとすれば、前期は独軍のポーランド侵入から、ソ連進出作戦（バルバロッサ作戦）まで（一九三九年九月一日～一九四一年六月二十二日）。中期は独軍のソ連進出からスターリングラードでの独軍降伏まで（一九四一年六月二十二日～一九四三年二月二日）。後期は独軍のスターリングラード敗戦から、連合軍のノルマンディー上陸まで（一九四三年二月二日～一九四四年六月六日）。終期が、連合軍のノルマンディー上陸からドイツの無条件降伏まで（一九四四年六月六日～一九四五年

五月七日)、となろう。

この期間における戦局のターニングポイントとなった出来事は、

①スターリングラード攻防戦の独軍敗退。

②連合軍のノルマンディー上陸作戦成功。

であった。①により独軍の主導的攻撃作戦はストップされ、以降は防衛的作戦とならざるを得なくなり、②により独軍の戦利の可能性はなくなった。日本の参謀本部がドイツに戦勝の望みなしと判断したのは、②により、連合軍の第二戦線形成が成功し、それに続いてヒトラー暗殺未遂事件(七月二十日)が起きたころであった。

この意味で連合軍のノルマンディー上陸作戦が開始されたDデイは、連合国がはっきりと勝利を手に掴んだ第一日といってよからう。ちなみに、太平洋方面の戦局と比較して考えると、①は、ミッドウェー海戦(一九四二年六月五、六日)、②は、マリアナ沖海戦(一九四四年六月十九、二十日)といつてもよからう。日本海軍は②によって日米戦勝利の可能性を完全に打ち砕かれたのである。

ノルマンディー上陸作戦の戦略的意味

ノルマンディー上陸作戦の意図するところは、対独戦において第二戦線(西部戦線)を作り、第一戦線(東部戦線)のソ連軍と共同して、独軍に二正面作戦を強いることであった。

軍事作戦遂行の基本的要諦は兵力を集中して、敵に勝る兵力でもって敵に当たることだ。

敵兵力を分散させ、集中した自軍の兵力でもって、分散敵兵力を各個撃破するのが、最も好ましい作戦遂行である。

ドイツは歴史的に東にロシア、西にフランスという二大国にはさまれている。その上、東部国境周辺も、西部国境周辺も平原地帯で、大山脈や、河川による大沼沢地帯といった天然の要害地帯がない。

このため、ドイツの政治・外交戦略の第一は、西部と東部の二国を同時に敵にしないことだった。国力がドイツと対等もしくはそれ以上あるロシアとフランスを同時に敵として、兵力を東部と西部に分散しては勝ち目がない。これがモルトケ以来の戦略だった。

不幸にして東西の二国と事を構えねばならなくなったときには、全兵力を集中してまず一気に迅速果断に西部方面で仏軍と決戦を行ない、返

す刀で準備の遅いロシア軍の陣取る東部戦線に全兵力を急運送し、ロシア軍に当たる。シュリーフェン計画がこれだった。

東西の二正面作戦を強制されること、長期戦に陥ることがドイツにとって最も避けねばならぬことだった。

第一次大戦では独軍は、シュリーフェン計画を基本戦略としたが、西部戦線(フランス方面)が膠着化して、東西両正面作戦を強いられる最悪の状況となった。この難局を乗り切るため、ドイツは革命騒ぎのあったロシアと単独講和を結んで、両正面作戦をかろうじて避けたのである。

ノルマンディーに連合軍が上陸し第二戦線が形成され、ドイツが自国以上の兵力を持つソ連軍、英米軍と東西の両正面で戦争遂行を強要された時点で、ドイツの敗戦は明らかとなった。このとき、独ソ間に講和の可能性はまったくなかった。英米軍のノルマンディー上陸作戦が、第二次大戦(欧州方面)の分水嶺といわれるゆえんである。

Dデイに到るまでの道程

英米の指導者はチャーチルとロー

ズベルトである。第一次世界大戦時、チャーチルは海相として、ローズベルトは海軍次官として共にドイツと戦った。両者は海軍戦略に通じ、海軍行政を知悉している海軍のプロだった。第二次大戦で英米を率いることになった二人は頻りに首脳会合を持ち(三年半の間に九回)、それ以外にも休日を除けばほぼ毎日とあってよいぐらい、ロンドン・ワシントン間の秘密通信網を使って書信のやりとりをした。

大戦間にチャーチルからローズベルトへの書信は九五〇通、ローズベルトからチャーチル宛は八〇〇通におよんだ。

米軍首脳としてローズベルトを補佐したのは米軍統合参謀長会議(JCS)のメンバーであるレイヒ海軍大将(議長)、マーシャル陸軍参謀総長、キング合衆国艦隊司令官兼海軍作戦部長、アーノルド陸軍航空隊司令官の四人だったが、レイヒは議長としてローズベルトとの連絡役に徹し、アーノルドは無条件にマーシャルに従う態度をとった。実質的に米軍戦略をリードしたのは陸のマーシャルと海のキングであった。とくにキングは戦略家として高い評価を得ていた。

チャーチルを補佐したのは英統合

参謀長会議のメンバーであるアランブルーク陸軍参謀総長、カニンガム海軍軍令部長、ポータル空軍参謀総長である。

欧州戦局におけるキングの戦略観は次の二点であった。

(1) 対独戦勝利の原動力の九割はソ連軍の力によるものとなろう。ソ連は人口が多く、強大な兵力が可能で、ドイツに進入するには地理的に最も恵まれた位置にある。このためソ連への武器・弾薬等の軍需品の援助は惜しんではならず、独軍によってソ連軍が崩壊するのは何としても避けねばならない。

第一次大戦時のように、独ソが単独講和を結ぶようなことが生ずれば、英米にとって軍事戦略的にきわめて深刻な事態となる。外交的手段でこれは何としても避けねばならない。

(2) 英米の連合軍をできるだけ早い時期に北部フランスに上陸させ、対独第二戦線を形成して、ドイツに東西二正面作戦を強要し、一気にドイツ本土に進撃する。

(2) に関してはマーシャルも同意見だった。マーシャルは日本軍による真珠湾奇襲の四日後、アイゼンハワー(当時陸軍中佐)を参謀本部の戦争計画部長に据え、米国の戦争遂行

戦略の大綱を策定させた。マーシャル・アイゼンハワー戦略は、①太平洋方面は防衛戦略、②欧州方面は攻撃戦略で、英米軍の北部フランス上陸から独本土進撃を第一とする。これはキングの(2)と一致していた。

英米間の首脳会議や軍首脳会議で、その後も意見がなかなか一致しなかったのは、この(2)に関してである。

それは両国の戦略観の相違を現わしていた。換言すれば政治家チャーチルと、軍事的観点一本槍のキングとの戦略観の相違ともいえた。

ドイツの軍事思想家クラウゼヴィッツは、「戦争は政治の一形態にすぎない」と喝破している。チャーチルの頭の中には常に政治があった。欧州の戦後の政治地図があった。

チャーチルが直截的な北フランス上陸作戦を採らず、①北部アフリカ上陸作戦②イタリア本土上陸作戦、③イタリアを足場としての中部欧州進出作戦を主張したのは、①、②は地中海への英国の影響力を強めることであり、③はソ連軍の進出よりも前に英米軍を進出させ、戦後の中部

欧州(ユーゴ、ハンガリー、チェコ地域)の政治地図を英米の影響下に置こうと考えたからであった。キングはチャーチルの考えが理解

できなかつた。何を好んでイタリアへ軍を派遣するのか。イタリアはむしろ英米のお荷物になる。中部欧州など対独戦にどんな関係があるのか。時間とエネルギーの最も無駄の少ない作戦を考えるのが戦略家の義務だ。それには北アフリカやイタリアや中部欧州などの迂回路をとらず、ストレートに北部フランスからドイツ本土に攻め入るべし。

マーシャルはキングと比べると妥協家であった。ローズベルトは政治家だ。英米間に亀裂が生じることを恐れた。

英米間の首脳・軍首脳会議はチャーチルの熱弁に押されて、ローズベルトはチャーチル説を採ることがつづき、北アフリカ作戦、イタリア本土上陸作戦が実施された。

ノルマンディー上陸作戦(以下暗号名のオーバーロード(大王)作戦という)実施日(Dデイ)決定までの英米両首脳・軍首脳会議の推移を眺めてみたい。

(1) カサブランカ会議

カサブランカ、
一九四三年一月

①Dデイの決定をせまる米側に対し英側は②シシリー島上陸作戦を提案。結局、②をこの夏に実施し、①は一九四四年以降と決まる。

(2) トライデント会議

(ワシントン、一九四三年五月)

イタリア本土上陸作戦実施が決まり、オーバーロード作戦のDデイ決定はされず。

(3) クオドラント会議

(ケベック、一九四三年八月)

Dデイが翌年五月一日と決まる。

(3) ユーレカ会議

(テヘラン、一九四三年十一月)

一九四三年の夏から秋にかけて、今後の欧州戦局の推移を考えると、ソ連の意図や希望を確かめることが必要になった。オーバーロード作戦により、北部フランスに第二戦線を作る場合、東部で第一戦線を担当しているソ連軍との戦略調整が何よりも重要となった。

このユーレカ会議ではスターリンは第二戦線の形成を強く望み、オーバーロード作戦の最高指揮官の未決定に不満を洩らした。また、オーバーロード作戦の側面援助のため、来春に東部戦線で大規模攻撃に出ることを約束した。

この会議では、英側がDデイを七月中旬にまで延ばしたいとい出し、米側を怒らせた。結局、Dデイの五月一日は五月中と変更され、スターリンの希望もあり、オーバーロード作戦とはほぼ同時期に南部フラン

ス上陸作戦（アンビル作戦）も実施されることとなった。

オーバーロード作戦の最高司令官は第二次大戦での最も華やかなポストとなる。ローズベルトはこの華やかなポストをマーシャルに与えたかった。このポストに就いた者が恐らく国民的英雄になるだろう。英米軍の戦力比からこのポストに米人が就くことに英側は異存がなかった。

最終的にローズベルトはアイゼンハワーを選んだ。全世界規模の大戦指導にはマーシャルに参謀総長の仕事をつづけさせることが必要だったからである。

D デイせまる

北部フランスのどの地域を上陸地点とするか。英仏間が最も接近している地域はドーバー海峡地域だ。ただ、この地域は英米側にとって次のような問題があった。

①ドーバー海峡の対岸カレー地域は、独軍の防衛陣地がもつとも堅固。

②大上陸船団用の港湾を考えると、ドーバー海峡に近い英国ケント州には輸送船団用の良港湾がない。

ドーバー海峡地域以外で、英仏間の距離が近いところとなるとノルマンディー地域となり、この地域は英米側にとって次のような利点があった。

①独軍の防衛網はカレー地域に比べて弱い。

②独空軍の行動範囲を考えると、カレー方面と比べ、この地域は独空軍にとって、より遠隔地となり、独空軍の戦力外帯となる。

③この地域の対岸には、ポーツマス、サウサンプトンをはじめ多くの良港湾があり、大船団の集結が容易だ。

上陸地点の決定は深刻な意見対立もなく、ノルマンディー方面と決まった。

当時、北部フランス方面の独軍司令部はパリ所在の西部軍集団総司令部（司令官フォン・ルントシュテット）で、オランダ、ベルギーから、イギリス海峡に面したフランスの海岸線防衛はロンメル元帥の指揮下にあった。

ルントシュテットの配下には六十個師団の兵力があり、そのうち四十三個師団をロンメルは握っていた。四十三個師団のうちノルマンディー方面には十八個師団、カレーからベルギー方面に十九個師団が配置され、他はオランダに五個師団、チャネル諸島に一個師団だった。ロンメルは、オーバーロード作戦が決定されたテヘラン会議のあった

一九四三年十一月、ダンケルクからアルターニュにいたる西部戦線沿岸防備の状況視察に派遣された。当時、ルントシュテットは英米軍がカレー方面に上陸するものと考えており、独国防総司令部も同じ考えだった。

英米軍はドーバー海峡対岸のケント州方面に偽装の軍隊を仮設置し、盛んに、偽の無線通信を発信していた。

弱体化していた独空軍は偵察飛行が充分できず、ケント州に英米軍の兵力が駐在していないことも見抜けなかった。

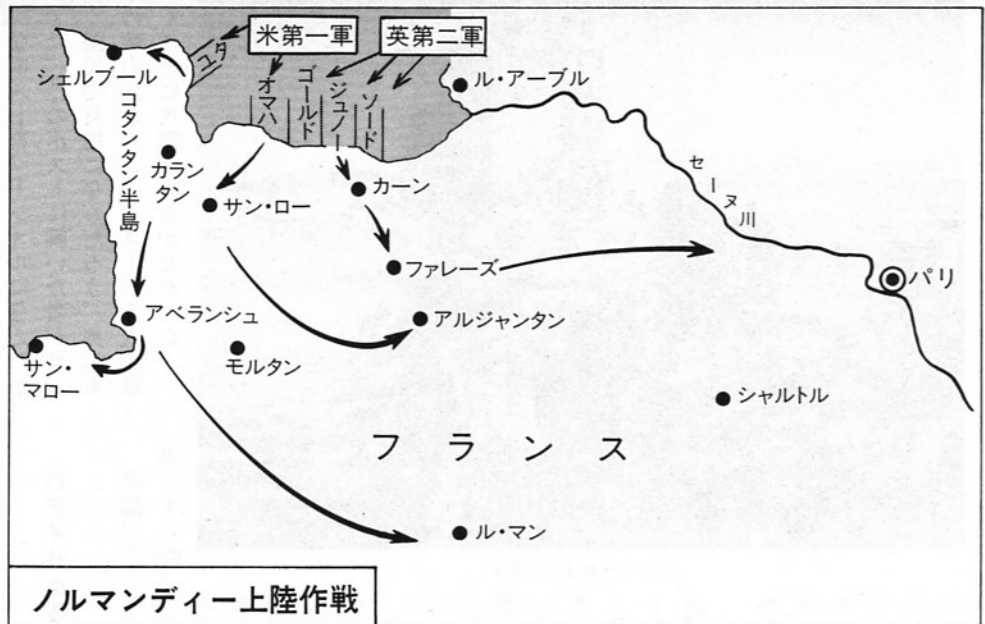
独軍も時間がたつにつれ、とくに一九四四年の春になると、ノルマンディー方面上陸間違いなし、と考えるようになった。英米空軍の活動状況や、英米空軍がこの海域に機雷敷設を一切しないことからである。

しかし、ヒトラーも含め、偽装無電活動を気にする人々はノルマンディー上陸以外にも、カレー方面への陽動作戦ないし第二次上陸作戦がある、と考えていた。

カレー方面にせよ、ノルマンディー方面にせよ、いずれ英米軍の上陸作戦があることは間違いない。この場合、どうして迎え撃つかに関して独軍内には二つの意見があった。



英軍の上陸シシリー島



(一) ルントシュテット元帥案——上陸軍を水際で阻止することは不可能。いったん敵の上陸を許してその後反撃に転じ、敵を海へ追い落とす。

の制空権下での作戦経験がなかった。結局、ヒトラーはロンメル案を採り、独軍は水際撃退戦術をとって対応しようとした。連合軍の総司令部メンバーは、総

(二) ロンメル元帥案——水際で徹底的に上陸軍を叩く。海岸と浜辺に無数の地雷を埋め、上陸する敵が最も弱い状態にある水際で上陸軍を潰滅させる。

ロンメルは、英米軍の上陸した北アフリカ、シチリア、イタリアの実態を研究し、敵の制空権下では、一度英米軍が上陸地点で足場を作ればもう撃退できない、と考えた。

これに対し、ルントシュテットは海岸線要塞が十分でない時代の海岸線防御に関する古典的テキストで教育を受け、英米軍

司令官にドワイト・D・アイゼンハワー陸軍大将(米)、副司令官にサー・アーサー・テッター空軍中将(英)、参謀長にウォルター・ベテル・スミス陸軍中将。ちなみにスミス参謀長は一兵卒からの叩き上げで陸軍中將になった人物だ。

攻撃実動部隊の指揮官は、陸軍がバーナード・モントゴメリー陸軍大将(英)、海軍がバートラム・ラムゼー海軍中将(英)、空軍がトラファード・リーマロリ空軍少将(英)だった。

モントゴメリー指揮下の上陸軍は米軍第一軍(ブラッドレー中將)、英第二軍(テンブシー中將)に分かれた。

Dデイは、米英軍首脳による五月一日との決定が五月中と延ばされ、さらに六月四日となっていたが、天候を考え、アイゼンハワーは六月六日決行を決断した。

Dデイ

Dデイの朝早く、沿岸防備施設の砲撃、機雷掃海、輸送船団護衛のための戦艦七隻を含む一二〇〇隻の艦艇と輸送船四〇〇〇隻が、ノルマンディーの上陸地点に向かっていった。すでに、この日に備えて独軍の交

通・通信網破壊のため、三五〇〇機の爆撃機による仏本土とベルギー方面への空爆が実施されていた。

六月六日午前二時すぎ、ノルマンディーの上陸地域に、まず連合軍の降下部隊(英米の空挺三個師団二万人)が降下した。海上からの上陸軍援護と戦術地点の確保のためである。

六月六日の未明には、英空軍爆撃機隊が海岸の上空に姿を現わし、海岸防衛施設に五二〇〇トンの爆弾の雨を降らせた。夜が明けると、ふたたび米陸軍航空隊の爆撃機が現われ、前回の爆撃でも残っている防御施設を空爆した。

この日の連合軍の空軍出撃数は一万四六〇〇回におよんだが、劣勢の独軍機の出撃回数は数百回に留まった。

海上に姿を現わした連合軍の艦艇は、艦砲射撃によって海岸の防御地帯を攻撃し、その後、上陸部隊の上陸がはじまった。独軍はこの日に攻撃があるとは予想していなかったの

で、結果的に奇襲攻撃となった。海上からの上陸地点は西から、①ユタ、②オマハ、③ゴールド、④ジュノー、⑤ソードと名づけられた地点に第一陣の上陸部隊七万人が、つぎつぎと上陸を開始した。①、②へ



ノルマンディー上陸のオマハビーチ周辺の光景

の上陸はそれぞれ米第四、第二十
九、第一師団、③、④、⑤へはそれ
ぞれ、英第五十、加第三、英第三師
団が上陸した。激戦となったのは②
のオマハ海岸で、三千名の死傷を出
してようやく足場を確保した。

たあとの問題は、一日に二万トン
を超える物資の揚陸基地の設置だっ
た。暗号名で「マルベリ」と称され
た組み立て式人工港が、イギリス本
土から曳航された。英本土からの油
送管が急遽取りつけられた。

た。このため、迅速な兵力の集中ので
きなかつた独軍は、上陸地点での連
合軍の撃滅ができなかつた。結果的
にいうとヒトラーの戦略判断の誤り
で、それは連合軍の偽装工作活動の
勝利ともいえた。

た。ポーツマスからロンドンへの車中
では、シャンパンの祝杯がつづい
た。

ノルマンディー上陸軍の撃破がで
きなかつた責任を問われて、ルント
シュテットは七月一日に解任され、
後任はフォン・クルーゲ元帥となっ
た。

土と上陸地点の海岸まで
海底を通って敷設され
た。この油送管は第二戦
線形成に必要な二万両の
車両を動かすのに不可欠
の設備だった。近代戦は
石油なくして成立しない
ことを示す象徴が、この
油送管であった。

上陸作戦に不慮の事態が生じた場
合、米英軍首脳による迅速な対応処
置が必要となる。

米軍首脳（マーシャル、キング、
アーノルド）は六月八日、空路ワシ
ントンを発ち、九日ロンドンに着い
た。

ロンメルも乗用車を連合国空軍機
から機銃掃射されて（七月十七日）
負傷し、戦線を離れた。

連合軍による第二戦線の形成は、
独軍内に大きな衝撃を与えたことは
もちろんだ。七月二十日にはヒトラ
ー暗殺未遂事件が起こり、嫌疑を受
けたロンメルは自殺を命じられる。

これら施設の四千隻
におよぶ輸送関連船舶に
より、上陸開始後十日間
で約六十二万人がノルマ
ンディーに上陸し、七月
末までに一五〇万人の兵
力が仏本土になだれ込ん
でいった。

翌十日夜、英米軍首脳はチャーチ
ルとともに列車でポーツマスに向か
った。翌朝ポーツマスに着き、アイ
ゼンハワーの出迎えを受けた。ポー
ツマスからは駆逐艦で対岸のノルマ
ンディーに向かい、上陸作戦地のオ
マハ海岸に上陸した。ブラッドレー
米陸軍中将の案内で数マイルの安全
地域を視察した。激戦直後でドイツ
兵が隠れており、狙撃される恐れも
あった。

Dデイの日、日本の陸軍参謀本部
の機密日誌は、
「果然、本日、英米軍は北仏海岸に
上陸作戦を開始す。……第二戦線結
成のための本格的な上陸と判断せら
る。いよいよ欧州戦局は一転機を劃
するに至れり」
と書いた。

連合軍の偽装無電活動
により、ドーバー海峡の
カレー方面への第二次上
陸作戦を恐れたヒトラー
は、セーヌ河以東の独軍
をノルマンディー方面へ
移動させることを禁じ

Dデイの八日後の六月十四日、米
軍のサイパン島上陸作戦がはじま
った。

た。

た。

た。